

やぶ くみこ (藪 公美子)

Asia fellowship 2018 - 2 最終報告書

2019年5月9日

Music improvisation in Asia to enable diversity
多様性を認めるアジアの即興音楽

1-1 プロジェクト紹介、重要となる活動について

わたしの専門は音楽を作ることであり、即興音楽家でもある。2007年に英国ヨーク大学大学院で共同作曲の研究を始めて以来、個人の技術や音楽性だけに頼るだけでない、複数の人が集まって共有できる音楽の形を模索している。音楽が得意な人もそうでない人も楽しめる音楽の仕方の”最小公倍数”のようなものだ。日本国内外で活動をする中で、これまで様々な人の個性と向き合い、共同作曲の活動を続けてきた。

即興演奏は基本は自由。しかし複数の人と共有するためには、少しずつ何かのルールを全員で決めていくことになる。少なくともはじめと終わりがあれば音楽の最低限のフレームはできあがる。ルールがどんどん細かくなっていくうちにいつしか、作曲ということになり、知らぬうちにその場とそこにいる人とでしかできない作品が立ち上がっていく。この調査において重要となる活動は、伝統音楽、民俗音楽、現代音楽などさまざまな音楽活動の場をなるべくたくさん見聞することだ。さらに商業的な音楽の側面だけでなく、教育の現場、地元の音楽の場所、音楽によって作り上げられるコミュニティに実際に赴き、可能であれば話を聞いたり、そこにまつわる話を聞くこと。

この度のリサーチにあたり、はじめにバンコクを選んだ動機はこの街が東南アジアの中心的存在であり、文化の交わる場所であると確信したからだった。また、伝統音楽の教育を初等教育で全員が受け、音楽を続ける人は西洋音楽の方に進んだり、タイ伝統音楽、または地方の伝統音楽の方に分岐していく。日本とは違い、全員が伝統音楽の基礎を学ぶところからそれぞれの音楽性がスタートしていく背景もとても特徴的だ。またエレクトロニクスの導入も盛んである。

多様性の中にある、“最小公倍数”、“絶対共通点”を見つける。

それがこのプロジェクトの核心の部分にあたるという結論がみえてきた。

1-2 受け入れ機関、協力者の紹介、プロジェクト実施状況

この度のタイでのリサーチはシラパコーン大学の民族音楽学教授のアナン・ナルコン先生の全面協力によって実現できた。先生の深い教養と、熟練した音楽家としてのスキル、世界中につながっている豊かな人脈から得られる知識や見識、明晰なアドバイスの数々をいただくことができ、大変心強く、非常に感謝している。彼は教育者としてのキャリアも長く、教え子はタイの全国各地、また他の東南アジア諸国にも点在している。アナン先生のエネルギーと愛情、そして音楽への、教育への熱意が引き継がれていると強く感じた。アナン先生はシラパコーン大学の他にプリンセスガリヤーニ

ワットナー音楽院¹と、モンクット王国立大学にも民族音楽学のレクチャーに行かれている。プリンセスガリヤーニワットナー音楽院とシラパコーン大学の学生は西洋音楽専攻の学生ばかりで、作曲を専攻する学生は数人いる。モンクット王国立大学では主にミュージックテクノロジーを学ぶ学生を対象に、ワールドミュージックの講義をし、音楽の多様性についてレクチャーをされている。また音楽家としての活動として、1983年に結成したタイ伝統音楽グループKorphai²での活動、テレビでのコメンテーターやラジオ番組のパーソナリティ、ポッドキャスト番組の配信など。大きなプロジェクトとしてはC ASEAN CONSONANT³というASEAN 10カ国が協働する音楽プロジェクトの音楽監修を務められ、東南アジアが発信する新しい音楽の可能性を実践されている。

1-3 協力者の紹介

今回の調査にあたり、様々な音楽家、音楽教育者、研究者、フェスティバル主催者など多くの方にご協力いただくことができた。バンコクではシラパコーン大学、プリンセスガリヤーニワットナー音楽院、またフアヒンで開催されているLive Loop Asia⁴の中心人物のひとりでありアメリカのLexiconの開発者であるギャリー・ホールさん、チェンマイ大学、ソクラーラジャバット大学、ロイエットラジャバット大学など各地の大学や鍵となる人の協力を得ることができた。また、タイに在住10年のアメリカ人、トミー・ハンソンさんはバンコク、フアヒンを中心に即興音楽を中心にしたフェスティバルを主催しており、自身の音楽活動について伺った。またプリンセスガリヤーニワットナー音楽院のアノタイ・ニティボンさんには音楽院での学生の様子、今後の展望についてインタビューすることができた。（各地での活動状況に詳細明記有）

1-4 本プロジェクトへのフォーカス

即興 コラボレーション 逸脱 調和

タイの伝統音楽には、伝統音楽としての根幹になるメロディーがあり、それを基にして即興し、絶妙な逸脱による即興演奏技術を見せるという側面があるということがわかった。

¹ プリンセスガリヤーニワットナー音楽院 - 2014年開校。生誕84年のGalyani Vadhana妃を記念し設立された西洋クラシック音楽と現代音楽のための音楽院。タイにおける音楽の新しい鑑賞者とプロフェッショナルの演奏家を国際水準まで教育し、様々な形の音楽体験を通して、若い才能を社会の調和に還元していくことを目的にしている。毎年国際シンポジウムを開催している。参照；<http://www.pgvim.ac.th/en/>

² Korphai - アナン・ナルコン氏を中心に結成された、タイ伝統音楽のみならずタイの伝統楽器を中心に現代曲の演奏する音楽グループ。1983年結成。東南アジアをはじめ、海外公演も多数。
参照；<https://en.wikipedia.org/wiki/Korphai>

³ C ASEAN CONSONANT - C ASEANは文化芸術が社会経済の発展の鍵であると捉え、組織されたASEANの芸術文化ネットワークのプラットフォームである。ビール会社CHANGの出資により実現した
参照；http://www.c-asean.org/en/portfolio/c_asean_consonant

⁴ Live Loop Asia - アジア諸国で多重演奏のライブパフォーマンスをするプロからアマチュアまでをつなぐ音楽ネットワーク。ミュージックテクノロジーで音楽の新しい可能性を開き、また東南アジア各都市で音楽フェスティバルを開催し、相互的に助け合ったり、情報を共有したりしている。
参照；<https://www.facebook.com/liveloopasia/>

各地の教育大学（Rajabhat University⁵）では、タイ伝統音楽と各地の民俗音楽、西洋音楽の3つを中心に実践的な教育がされている。また吹奏楽やオーケストラ教育も盛んで、民俗音楽とのコラボレーションもされている。

タイではイーサン地方（タイ東北部）の音楽が昨今は人気で、とくにバンコクでは街角に立つストリートミュージシャンもケーンやピンを演奏する人が多く見受けられた。

1-5 タイの文化情報、文化芸術状況の報告

バンコクでは実に多様な文化に触れることができるのが特徴だと言える。バンコクの中心地は東京とも引けをとらない立派なショッピングモールや建物が建ちならび、世界中からきた人々が交差する。今年はバンコクアートビエンナーレ⁶も開催されていた（バンコク市内各地と、メイン会場にバンコク芸術文化センター）。毎週末に多ジャンルのアーティストとのコラボレーションが見受けられたのが大変興味深かった。滞在中見ることができたのは2つのプロジェクトで、プリンセスガリヤニヴァッタナー音楽院の学生たちによる、インスタレーション会場の演奏会では、展示作品に合わせた現代音楽の新曲世界初演も行われ、演奏会という形をとらない自由なスタイルに観客も非常に楽しんでた。

もうひとつはタイを代表するダンサーのピチェット・克蘭チュンさんによる 'The Intangibles of Emptiness "OVERLOADED"' というコンセプチュアルな3日間のプロジェクトだ。ビエンナーレ閉



会後の何もない空間でどう遊び、なにを”鑑賞”するのかというものだった。真っ白になった壁にはマスキングテープでキャラクターが描かれていたり、いろんな言語で言葉が書かれたり、また新しくきた人がいくつかのものを関連づけたり、その壁の前で写真を撮ったりして自由に過ごしている。パフォーマンス最終日に訪れたのだが、この日はこれまでの2日で貼り付けられたものや、置かれたものをピチェさんとスタッフが少しずつ撤去しているところだった。壁に残された言葉から、バンコクは実にさまざまな国から人が集まっていることがわかった。バンコク芸術文化センターは街の中心部にありサイアム駅とチュラロンコン大学の近くに位置している。9階建てのビルで、カフェや書店、ギャラリー、大型展示室、劇場なども含む文化複合施設だ。渦巻状になっている建物の壁には写真展も催されている。英語でアクセスできる情報が多く、外国人にとっては非常にありがたい。

一方、伝統音楽のコンサートについては非常にアクセスが難しいと感じた。アナン先生が司会を務めたソードゥアン奏者で作曲家のヴォラヨス スクセション (Vorrayos Suksaichol)先生の生誕70周

一方、伝統音楽のコンサートについては非常にアクセスが難しいと感じた。アナン先生が司会を務めたソードゥアン奏者で作曲家のヴォラヨス スクセション (Vorrayos Suksaichol)先生の生誕70周

⁵ Rajabhat University - 主に教員を育成する目的で作られたタイの大学システム。

参照；https://en.wikipedia.org/wiki/Rajabhat_University_system

⁶ Bangkok Art Biennale - <http://www.bkkartbiennale.com/>

年記念コンサートに伺うことができた。コンサートの案内のポスターやSNSの情報は全てタイ語で書かれおり、アナン先生のご案内がなければたどり着けなかった。超満員の会場と、さらにコンサートの様子はUstreamでインターネット配信され、そのアクセス数は8万件を超えたということに大変驚いた。国内で伝統音楽の層が厚いことの表れであると感じた。入場料は無料であった。

前述したがバンコクでは、タイ東北地方であるイーサンのモーラム音楽が流行している。アップビートなポップスもとても流行っているが、全体的に歌謡曲的ニュアンスがしっかり残っているテイストのものと、洋楽にかなり傾いたものと両方ある。イーサンの楽器、ピン（弦楽器）、ケーン（笙）、うた、ベースギター、ドラムという編成のバンドがたくさんあり、バンコクのSTUDIO LAMを中心に活動をしているグループがある。歌詞には恋、日常生活に加えて民族の苦労や、国境について歌われており、非常に切実な内容だ。

チェンマイは外国人が非常に多かった。街中のいたるところに英語の表記があり、すっかり観光都市になっていた。ナイトマーケットでは盲人の音楽グループや、お寺に所属するおじさんたちの伝統音楽の演奏、改造車に乗ってスンで弾き歌いをするおじさんなどを見かけた。シャンバラフェスティバルが毎年あり、ヒッピーカルチャーの場所でもあると感じられた。

1-6 活動拠点の様子、滞在地の文化、習慣について

”サバーイ か マイサバーイか” ”サヌックか マイサヌックか”

サバーイとは気持ちいい、ということ。サヌックは楽しい、ということ。

タイの人を見ていると、この二つがとても大事にされているように感じる。ワークショップを学びの場として設定し、”真面目”すぎて不自由になってしまうことよりも、楽しい時間であることを重視し、関わる人が快適でいられるように心がけることはどこにいても大事な要素と感じた。

しかしながら、タイ人のニックネームの付け方には容赦がないように感じられた。たとえば KUROBUTA というあだ名のついた人がいた。本人は抵抗を少し見せながらも、さらりと開き直り、受け止め、周囲の人と仲良くしている様はさすがしくもあった。一見偏見や差別的にみえることを案外おおらかにポジティブな特徴と捉えて受け止めているところには関心した。またタイでサワディーカーという挨拶ができたのはここ60年くらいの話で、それ以前はキンカオレーオ？（ごはんたべた？）という挨拶だったと聞き、食文化の豊かさと通ずるものがあるように感じた。

タイの食の美学はすべての味覚を1度の食事で味わうこと。甘、酸、辛、苦、旨。たくさんの種類を味わえることが美德とされる。一つの料理でも複雑で立体的な味わいがあり、どれもとてもおいしい。間違っても辛いものが得意とは言ってはいけない。日本人にとっては「辛くしないで」＝十分辛いレベルだからだ。

バンコクへは12年前、5年前、今回と3回訪れているが、見たことのなかった大きな建物が増えたり、橋が増えたり、タクシーのぼったくりが減っていたり（まだいますが）、物価の幅が大きくなっていたり、行く場所によって、さまざまな人、コミュニティーがかなりくつきりしてきているようにも感じた。

タイにおいて、左手でものを渡さない、頭に触れない、という習慣は消えつつあると感じた。（インドネシアでは左手で渡さなければならない時は一言断る。）

2. フェローシップ活動記録

今回の調査ではバンコクを拠点にし、タイ北部のチェンマイ、タイ南部のソクラー、中部沿岸フアヒン、タイ東部のロイエットの5つの都市を巡った。

それぞれの都市で歴史的な背景が違い、音楽、楽器、文化、民族に顕著に違いがある。右の地図は、今回の調査で訪れた場所と移動のルートと手段を図式化したもの。

2-1

チェンマイ

CHIANG MAI - NORTH WEST < LANNA > THAILAND

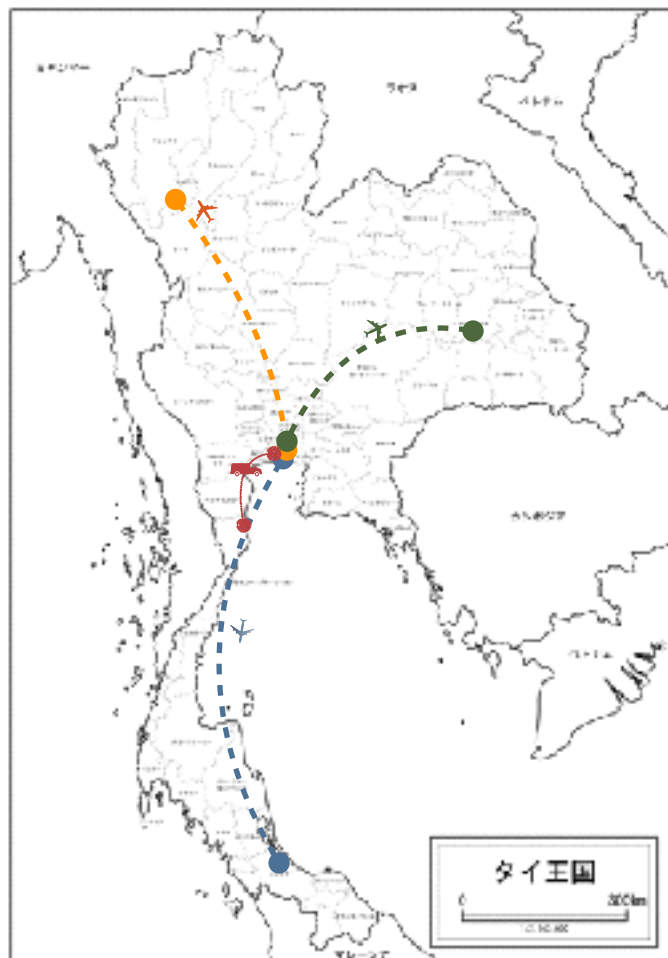
2019年1月26日から1月30日

< 視察の概要 >

Lanna Architecture Centre で開催されていたフェスティバルの視察
コーン仮面伝統舞踊⁷の鑑賞
楽器製作者であり演奏家である Parinyaphak Sonti (WHITE) さんとの面会

< 移動交通手段 >

バンコクから飛行機で移動
NOK AIR



Sat 26 Jan 2019	DD8310 Nok X-tra	Bangkok (Don Mueang) 10:40 hrs	Chiang Mai 11:55 hrs
Wed 30 Jan 2019	DD8315 Nok X-tra	Chiang Mai 15:25 hrs	Bangkok (Don Mueang) 16:35 hrs

3885 THB

チェンマイ市内での交通手段はGRAB Taxi または グレート・ルカクン (Great Lekakul) さんの車で移動。

⁷ コーン仮面伝統舞踊—演目はラーマキエン物語 (ラーマヤナ物語) のみが演じられ、身振り手振りで感情が表現されている。仮面は神のように丁重に扱われる。<参照；<http://www.itdaschool.com/ramakien.htm>>

<滞在>

Roongruang Hotel

398 Thapae Rd., T.Chang Moi, A.Muang, Tha Phae, Chiang Mai, Thailand 50300

4800 THB / 5 nights

到着後宿に予約が確定されておらず、チェックインにかなり時間がかかった。幸い空き部屋があったので宿泊できたものの、ウェブ上だと実際の料金よりも1300バーツも高く、外国人であることのハンデを思い知ることになる。（1日あたり700バーツのところ、960バーツだった）

<協力者の紹介>

Dr. Great Lekakul (グレート・ルカクン) さん

チェンマイ大学 講師 及びタイ伝統音楽演奏家、オーボエ（タイ）奏者

英国 SOAS University of London 博士課程修了され、ロンドンに7年在住後、帰国。

また日本では神田外語大学にも在籍したことがあり、その際には尺八の勉強をされていた。

韓国にも5年在住。タイのチュランロンコン大学ではタイの伝統音楽を修められた。

アナン・ナルコンさんの率いるバンドKorphai に10年在籍した。

研究のテーマはタイの伝統音楽における即興音楽について。

<街の印象>

城壁に囲まれた街であり、ランナ王国の中心都市だったチェンマイは私自身が住んでいる京都市と大変似ている印象を受けた。

徒歩、または自転車でアクセス可能な距離感と、寺院が多いところ、多種多様なアートが混在し、国際的な観光都市であるところ。

街にいくつかあるライブハウスでも定期的にセッションが開催されており、観光に来た外国人がふらりと参加する余地がある。

Lanna Architecture Center

Lanna Art Festival にてイベントを鑑賞。露天はチェンマイのローカルフードが伝統的な調理法で提供されていた。また工作のワークショップも開催されていた。



Lanna Art Festivalでの演奏の様子



Lanna Art Festival での露店の様子

音楽はJoe Bringkop (Lecturer at Payap University) さん (写真左より2人目) 率いるグループによる、伝統音楽とポップミュージックが融合した音楽。笛の旋律を中心に作られた曲で、日本の歌謡曲を思わせる節が特徴的だった。

タイの伝統音楽の演奏では、Parinyaphak Sonti

(WHITE)さんのグループの演奏を聴くことができた。しかしこの時点では、彼のところに行くことは決まっておらず、あとで写真を見返してその人であったことに気がついた。

Greatさんに聞くと、Greatさん自身もチェンマイ大学に半年ほど前に赴任したばかりで、現地とのつながりはまだほとんど出来ていないという。私の来訪がどうやら好機だったようで、これを機にいるいるな人と知り合うチャンスでもあった、ということをおとから聞いた。

コーン仮面舞踊



タイの伝統仮面舞踊の公演が、Three Kings Plazaの会場にて無料で開催されていた。伝統的な仮面のことをコーンという。1000席はあるであろう大きな野外会場に、隙間なく観客が入り、立ち見もたくさんいる。

演目はインド叙事詩 ラーマヤナ。タイの舞踊では感情を表す振付が明確に決まっている。

言葉をいわずとも、身振り手振り、体の動きでキャラクターの感情を判断する。物語の筋はGreatさんが端から説明をしてくださるのである程度理解ができた。上演時間は3時間ほどであった。

演目が始まる前に主要なキャラクターの紹介と感情を表す振付の紹介がされている。

即興音楽に対する2面的アプローチ

「それは音楽じゃなくて、瞑想だ。一体なにがしたいんだ。」

Greatさんと即興音楽についてのディスカッションをした。

わたしは即興演奏を多くの人とやる時に大事な3つの要素「待つ、開く、尊重する」を大事に音楽をしている、という話をGreatさんにした。そうするとそれは音楽ではなくて瞑想だ、音楽できないじゃないか、との意見だった。お互いの音を聞きながら音楽をするための工夫だという話をしても、何を言っても、聞いてもらえなかった。どうしてそう思うのかをよくよく聞いてみるとGreatさんは私とはまったく逆の、プロの音楽家が演奏する、逸脱し、いかに格別で最高の即興とは、という方の研究をされていたという話をきき、とても納得がいった。

調和することばかりに重きを置いていたので、こちらの方のアイデアをすっかり見失っていたことに気がついた。しかしカケラもご理解いただけないのはこちらも悔しいので、一生懸命に自身の即興の体験を話したものの、最後までわかりあえなかった。

しかし、分かり合えた部分もあった。ワールドミュージックと言われる分野に興味があり、それぞれ民族音楽に向き合い、演奏家としても追求している身である。共通の問いは「音楽は国境を越えるのか?」「音楽がユニバーサルだっていうのは本当なのか?」という音楽の原点に関わる問いを抱えているということがみえた。

チェンマイの楽器

楽器の作り手でもあり、演奏家でもあるParinyaphak Sonti (WHITE) さんの楽器店を訪問。Greatさんも交えて3人で即興音楽をすることもできた。前日のディスカッションで少しご理解いただけただけで安堵する。



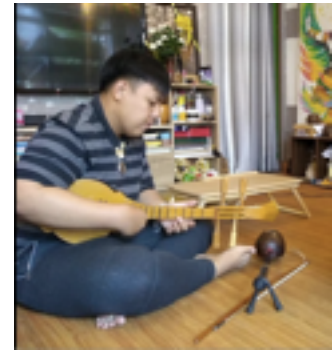
←ピンピア

昔からあるものは2弦、最近は4弦のものがある
ハーモニクスで奏でる楽器で、直接弾くというよりは、打ち響かせるような奏法である。
伝統的には夜這いの楽器であったそう。

スン→

複弦、2コースの弦楽器

フレットはランナの音階にチューニングされており、
バンコクを中心にしたタイの音階とは幅が違う。



←サロー

擦弦楽器で腕先ほどの長さのコンパクトな楽器。ココナッツの殻でできたボディが割れやすいので、持ち帰りを勧めてもらえなかった。

ストリートミュージック

チェンマイでナイトマーケットが開催され、どこにもぎわっている。

目の不自由な人が路上で1列に座ってパフォーマンスをしていたり、音楽的に改造されたバイク（右の写真）にまたがりスンの弾き語りをするおじさん、寺院の前で演奏するランナ伝統音楽グループ（左の写真）がいた。

ギターでフォークソングを演奏するような、よくありそうな路上演奏がみられなかったのがとても印象的だった。



2-2

ソングラー

SONGKHLA - SOUTH THAILAND

2019年2月4日から7日

<視察の概要>

タイ南部の芸能である、ノラダンス、ムスリムの音楽ロンゲン、影絵ナンタルン、またプーケット方面のSea Gypsyの音楽の研究者の方に話を伺った。

<移動交通手段>

バンコクから飛行機で移動

THAI SMILE AIR

✈ MON 4 FEB 2019
19:40 BANGKOK BKK
Suvarnabhumi International Airport
21:05 HAT YAI HDY
Hat Yai International Airport
✈ THU 7 FEB 2019
21:35 HAT YAI HDY
Hat Yai International Airport
23:00 BANGKOK BKK
Suvarnabhumi International Airport

3050 THB

現地での移動は、Ratchavit MusicarunさんとSakolput Kottunti さんが全行程車でご案内してくださった。

<滞在>

LE SIRI HOTEL

63/226 Kanjanavanit Rd. Soi 33 T.Khaoroobchang, Songkhla city, Songkhla, Thailand 90000

2100THB / 3 nights

<協力者の紹介>

Dr. Ratchavit Musicarun ラチャヴィット ムジカルン (通称 Pam) さん - Lecturer of Songkhla Rajabhat University

ソングラーでの地域でのリサーチを中心になってアレンジしてくださりました。同大学ではタイ伝統音楽のレクチャーを中心に行われており、また毎週木曜日にはボランティアでPrince of Songkhla

University にある病院でのコンサートと医学部教諭へのレッスン、芸術学部棟にて福利厚生のためのタイ伝統音楽のセッションに参加されている。

Sakolput Kottunti サコンプ コットウンティ (通称 Emy) さん - PhD student of Mahidol University

わたしのソングライター行きに合わせて、バンコクから私と同じ便で同行くださり、ほとんどの行程をお手伝いいただきました。

マレーシアとの国境に近いナラティワ市の出身。ソーウーの演奏を幼少期からされ、タイ伝統音楽のチャケー奏者、Songkhla Rajabhat Universityで講師を務めたのち、学位取得のためバンコクのマヒドン大学にて博士課程を修了されたばかり。

Dr. Rewadee Uengpho レワディ ウエンフォさん - Sea gypsy researcher / Lecturer of Prince of Songkhla University

初日にお会いし、プーケットを中心とした小島に住む、イスラム教徒で海洋ジプシーの音楽の調査をされている。

Dr. Chaiwut Kosol チャイウット コンソン さん - Dean of Songkhla Rajabhat University
音楽学部学長。タイ伝統音楽が専門。

Ratchaya Weerakarn ラチャヤ ウェラカンさん - Likay Pa researcher / Lecturer of Songkhla Rajabhat University

ノラダンスの話をしていて、ノラダンスとも類似性のあるタイ南部の即興劇リケパの研究者であることをお話しくくださった。

リケパとは話の筋が決まっている即興劇で、また即興で歌を歌うこともある芸能。

途絶えてしまうおそれがあり、82歳の女優が残るのみだという。

このような芸能はマレーシアやカンボジアにもあり、それぞれJikeyやYikeという名前で呼ばれている。ルーツは不明。

Aphichat Kantacha アピチャット カンタチャさん - Longen musician / Lecturer of Songkhla Rajabhat University

Thatsaniya Kantacha タサニヤ カンタチャさん - Longen Dancer/ Lecturer of Songkhla Rajabhat University

Kuan Tuayok クアン トゥアヨックさん - Oboe master (人間国宝 National Artist)

ナンタルン

夜に到着してすぐにタイ南部の影絵ナンタルンを鑑賞。人形遣いが一人で話し、演じる。マレーシアやインドネシアの影絵のスタイルに近いと感じた。

伝統的にはタップタップと言われる中東のダルブッカに似た乾いた音が特徴の2組太鼓とクロントンという和太鼓の小さいもののような太鼓、コンという凸のある鍋型の1対ゴンと、ピーと呼ばれるオーボエで奏でられていたが、最近ではベースギターやドラムセットなどが入り、モダンな形式になっている。

影絵で使用するタップタップはノラダンスで使うものより小さめの太鼓を用いる



ナンタルンを演奏者側から撮ったもの

タイ南部の芸能に欠かせないのは打楽器のタップタップ



実演中のDr. Chaiwut Kosolさん

12パターンのリズムがある。リズムは主に歩くスピードやどんなキャラクターの歩みなのかによってリズムが変わる。

影絵のナンタルンで上演される話の数々はアユタヤ期にインドから伝わったとされる。影絵はTheatre Therapyとしての要素もあり、神様やご先祖にメッセージを伝えたり、感謝を表明したり、お願いごとをする場でもあった。

話の内容は民話や仏教、お釈迦様の話が中心。近代になるとエンターテインメントとしての要素が強くなってきた。

オーボエを中心とした音楽で、ワイクルーの儀式を演目の前に必ず行っていた。

ナンタルンのルーツ

現代では、影絵の音楽もモダンに変化をしている。伝統のオーボエだけで演奏される機会はほとんどなくなったと言ってもよいほど。電子楽器が台頭し、音量が大きく、華やかではあるが、昔にあった独特の音のよさは失われつつあり、曲もどんどん短くなっている。昔はシーンによって音階の違うオーボエを使用し、影絵は夜8時から明朝6時まで上演され、2、3日続くこともあったが、現在では午前1時に終了することが多い。

影絵自体はジャワから象の軍隊の話をもチーフにしたものとともに伝来し、初期にはパームの葉で作った人形からはじまり、その後水牛の皮で人形を作るようになった。ラーマ3世（在位1824年ー1851年）の時代からはじまったナンタルンはしばらくは打楽器のみでの伴奏だった。オーボエが入るようになったのは、90年ほど前の1920年ごろだという。

ラーマ5世（在位1910年ー1925年）は街を治めるためにナラティワー（タイとマレーシア国境にある街）に入り、バンコクを中心に栄えたタイ王宮音楽（ピパット、マホリ）も同時に来た。そこで演奏されていたオーボエがナンタルンやノラダンスに取り入れられるようになった。



ノラダンスの歌唱のシーン

ノラダンス

現存しているノラダンスには2つの様式がある。ひとつは儀式的様式の強いもの、もうひとつはエンターテインメントとしての芸能。

儀式的な部分を担当することができるのは男性のみとされている。

ノラとは半人鳥のことである。ノラには性がないため、中性的な存在であるが、男性役、マスクをつける道化役と女性役が存在する。そしてよく変身するという設定になっている。

ノラのダンスもタイの伝統舞踊と似た部分があり、言葉に動きをつけて振り付けとしている。

しかし、言葉は即興で歌われる。しかも4音詩、6音詩、8音詩というフォーマットがあり、1節の最後の音と2節めの2音目(●)、4節目の最後の音と6節目の最後(◎)を韻を踏むように読むというルールがある。

○○○● ○●○○
○○○● ○●○○◎
○○○● ○●○○◎
○○○● ○●○○

この形式の詩は、日本人が俳句や川柳、短歌を習うように、初等教育で習うらしい。
Nora Tambot (tam = do, bot = script) = 即興詩という。

ノラダンスの言い伝え

ノラダンスの言い伝えについて聞くことができた。しかしながら、ものすごく簡略的に話してくださったため、どこのなんというお姫様なのか、キャラクターの名前がわからない点などざっくりとした説明であることをお許しいただきたい。

半人鳥であるノラの出てくる夢をそのお姫様はみた。夢の中で12のポーズを見て覚え、さらに召使いにもそのことを伝えた。

ある日その姫は、身に覚えがないのに妊娠をし、王である父親は怒って姫を離れ島に幽閉する。

島で姫は男の子を産み、その男の子は姫から夢で見たという12のポーズを習う。

男の子は芸能者となり、その芸がもともとお城のあった島でもそのパフォーマンスが有名になる。話題のパフォーマンスを一目見たいと、王様はその男の子を招いた。

パフォーマンスをみて、自分の孫であることを確信し、王様の衣装を授けた。

ノラダンスの衣装が王様の衣装であるのはこのことが由来である。



ノラの衣装のバックスタイル。鳥の尻尾を模した部分は水牛の角でできており、衣装はずっしりとしている。カラフルなビーズでできている。

ノラのマスターのことをナイローと呼ぶ。かつては儀式的な要素とエンターテインメントな要素に加え、トランスもあった。



ノラダンスの養成所。小学校の横に隣接している。放課後に子供達が行っており、厳しい訓練がされている。右側の子たちは蝶のポーズの練習中。

ノラのダンサーになるには、ダンスがうまく、話がうまく、即興詩ができ、歌う技術に加えて、容姿も美しいという素質を全て揃えていなければならない。

上演時間は自由だが、夜通し行うこともあったし、同じ集落の中にたくさんのグループがあった。

プロの演者になるとリハーサルはしない。

エンターテインメント要素の強い方のノラダンスでは、体の柔軟性を生かした独特のポーズがたくさんあり、幼少期から訓練する必要がある。

ナンタルンとノラダンスの音楽の違い

タイオーボエ奏者で、人間国宝でもあるKuan Tuayokさんに話をうかがった。現役（若い時）時代には、海外公演もたくさんされ、日本にも演奏に来られたことがある。ナンタルンもノラダンスも同じ楽器を使用するが、厳密には少しずつ違っている。

ナンタルン Nang Talung	項目	ノラダンス Nora dance
ピーヨン（小さい笛）	使用する笛	ピートゥン（大きい笛）
小さい	太鼓	大きい
オクターブ	コン	5度
シーンごとにきまっている	奏法	歩き方、飛翔などのシーンごとの音楽、および即興
感情を入れる	演奏スタイル	ダンサーに合わせる

楽曲はキャラクターによっても決まっており、女性、王様、神様でそれぞれ音楽が違い、秘伝である。

タイのオーボエ

タイのオーボエは、ノラダンス、ナンタルンのほかにタイの文化に欠かせないムエタイで演奏される。

ナンタルンとノラダンスで使用されるオーボエのリードは8枚で構成され、タイ伝統音楽で使用される4枚のものよりも枚数が多い。リードはパームの葉で作られる。

サイズの短いオーボエ、ピーヨン（6枚リード、7穴+1穴）を使用し、試合前のワイクルー、戦いの最中、戦いの終わりで音楽が変わる。ワイクルーと終わりの音楽には決まりがあるが、戦い中の音楽はドラムのパターンにあわせて自由に即興で演奏される。ワイクルーとは大会の前に演奏される音楽で、師匠や先祖、自然の精霊に感謝する意味がある。

Gayok または Kayok と呼ばれる武術があり、現在ではパフォーマンスの形として残っている。

ピーガヨックというガヨック専用のオーボエで演奏され、4枚リード、6穴+1穴である。

ピーガヨック（オーボエ）、クロントン（1対の太鼓）、ゴンの構成で演奏される。

笛は奏者が亡くなった時に墓と一緒に埋めてしまうので、残ることがない。



オーボエ奏者で人間国宝のKuan Tuayokさん。左からオーボエの大（ピートゥン）、中（ピーチョウ/スルナイ）、小（ピーヨン）。

海洋ジプシー（タイ南部の少数民族）

プーケットを中心に、定住しない海岸部に住むジプシーが存在する。
海洋ジプシーの音楽を研究されている、Rewadee Uengphoさんに話をうかがった。
海洋ジプシーには3つのグループがある。

	Urak Lawoi (Orang Laut)	Moklan	Moken
居住地	プーケット島や近くの小島に住む	タイ本島の海岸沿い	ミャンマーから来た
言語	ウラックラオイ語	タイ語	モーケン語
音楽	バノーと呼ばれる大小の2つ太鼓とバイオリンと歌。 階級によって音楽が変わる	バノーと呼ばれる大中小の3つ太鼓とシンバルとコン、女性の歌	バノーと呼ばれる大中小の3つ太鼓と歌とKatingという2弦フィドルと歌
音楽性、特記	イスラムの影響を受けた音楽。バイオリンのチューニングは歌の人に合わせるので低めであることが多い。5度チューニング	カラーチのリズムとダンドウツッドのリズムのシンバル	ほとんど即興音楽、歌はいつも違う フィドルには2種類あり、バイオリンに近い形とソードゥアンに近い形のもの
住居	さまざま	高床式住居	高床式住居

ロンゲン

タイ南部にはイスラムの影響を受けた芸能がある。また人々の階級によっても音楽が違い、ロンゲンとはダンスのスタイルの名前でもあり、4つの基本のリズムがある

- 1、Asli 原点という意味、遅いテンポでジャワから由来
- 2、Sampen 腰巻という意味、中くらいの速さでアラブ諸国から由来
- 3、Inang マレー×中国のことをイナンという。速いテンポ
- 4、Joghet 踊るという意味。とても速いテンポでポルトガル由来

バイオリン、女性による詩（Pantung）、大小の太鼓2つで演奏される。伝統的な詩が存在したが、失われたそう。



ロンゲンのリズムパターンを紹介してくださるAphichat Kantachaさん（写真右端）と学生さん

ソクラのコミュニティーミュージック



セッションの様子。



手作りのソードゥアン

Ratchavit Musicarunさんのご案内で、ハットヤイのある集落で毎週木曜夜に集まって音楽をしている場所にご案内いただいた。（調査の関係で特別に水曜日にずらして、みせてくださった）

小さい子供からお年寄り、老若男女が集まっている。

集まって演奏している曲目は民謡であったり、影絵の曲、ノラダンスの曲、または即興演奏とのこと
楽器はおのおのが自作しているものがほとんどである。

また、Ratchavit Musicarunさんは毎週木曜日、大学の授業がない日にPrince of Songkhla University内にある病院を訪ね、病棟のエントランスにてボランティアで小さな演奏会をしている。共演者である病院の女医さんと、2人の男性の医師の方は医療の職につきながら音楽も堪能で、この日はRatchavit Musicarunさん、Sakolput Kottuntiさんと私を含めた5人で演奏した。歌謡曲が中心。わたしは他の曲には即興的に参加し、最後に日本の曲「りんご追分」、「星めぐりの歌」を披露した。

演奏後、同じ建物内で病院職員のためのタイ伝統音楽のレッスンでRatchavit Musicarunさんが指導していた。



写真右端がDr. Ratchavit Musicarun さん。ソクラでの調査を大変豊かなものにしてくださった。

大学の広い敷地内にある芸術学部のある建物では職員の福利厚生目的のタイ伝統音楽の時間が設けられている。指導にあたるのはタイ伝統音楽の演奏者でRatchavit Musicarunさんとは別の方だが、Ratchavit Musicarunさん、Sakolput Kottuntiさんも演奏に混じっておられた。

2-3

ロイエット

ROI ET - NORTH EAST < ESAN > THAILAND

2019年2月14日-17日


<視察の概要>


タイ東北地方（イーサン）の楽器および楽曲と各楽器の奏法のご紹介、現地の影絵ナンプラモタイ（バットゥ）の鑑賞、大学生の作曲作品の鑑賞

<移動交通手段>

バンコクより飛行機で移動

Air Asia

 Bangkok - Don Mueang (DMK)		
Depart / 去		07:15
Bangkok - Don Mueang (DMK)		Thu 14 Feb 2019
Arrive / 来		08:25
Roi Et (ROI)		Thu 14 Feb 2019

 Roi Et (ROI)		
Depart / 去		08:50
Roi Et (ROI)		Sun 17 Feb 2019
Arrive / 来		09:55
Bangkok - Don Mueang (DMK)		Sun 17 Feb 2019

3625 THB

<滞在>

Rajabhat Green View RERU (Hotel)

113 Mu 12, Roi Et - Phonthong Road, Selaphum, Roi Et, Thailand 45120

900 THB / 3 nights

<協力者の紹介>

Thanawat Bootthontim タナワット ブートンティン（通称 Tanさん）- Lecturer at Roi Et Rajabhat University

Nikron Chompukhao ニックロン チョンプカオ- Student

Janteryというタイとカンボジアの国境にある村の出身。タイ語とクメール語を両方話す。

Kiadtisak Sricham キアディサック スリチャム- Student

Kiattipan Sricham キアティパン スリチャム- Student

双子の兄弟、ロイエット出身。

Chok Chai Paipuk- チョッチャイ パイプック Student

学生でありながらモーラムの歌手としても活動している



Roi Et Rajabhat Universityを中心にタイ東北の音楽の調査をした。ご案内をしてくださったThanawat Bootthontimさんはウボン・ラチャターニー出身。タイ伝統音楽のコン奏者でもある。アナン先生と海外公演を共にされている。大学に赴任して10年になるそう。こちらの大学でも、他の地域のRajabhat Universityの音楽学部と同じく、タイ伝統音楽と地域の伝統

音楽、西洋音楽の3つを教えている。

10年前と比較して変わった点は、音楽を教える割合として、イーサン音楽に取り組む時間が大幅に増え、タイ伝統音楽は逆に減ったという話を伺った。

学生たちは新曲の作曲にも積極的であり、到着した当日は学校の式典にてイーサン音楽とブラスバンドが共演する新作が演奏された。

イーサン地方の楽器

ラオス、カンボジアに近いタイ東北地方には他の地域にはない独特な楽器がある。

モーラムという即興詩を中心にした歌に加え、以下のような楽器がある。

Roi Et Rajabhat Universityにて、楽器を全て見せてもらえることになった。

ケーン(Kaen)

タイの笙。大中小の3つのサイズがあり、よく演奏されるのは中くらいのサイズのもの。

細い竹18本と吹き込み口、吸っても吐いても音がでる。



写真左手が一般的に演奏されているケーンの中サイズ。右手のは2メートルある大サイズ。



ポンラン(Ponglang)

木琴。鍵盤は硬くて重い木できており、5音階だが、中央の音階にはひとつだけFが含まれている。2オクターブ半。長い方を上にセットするのがロイエット式、短い方を上にセットするのがウボン・ラチャターニー式

ソーイーサン(Saw Esan)

2弦フィドル。クメール（カンボジア）からの移民Touwが持ち込んだ楽器。

タイの伝統楽器ソードゥアンとよく似ている。



ヴォット(Vod)（左の写真 右側）

12本の細竹でできたパンフルート。5音階である。

ピン (Pin)

弦楽器、3弦。チューニングはEAE。フレットがあり、ダイアトニック（全音階）のものとペンタトニック（5音階）のもの、両方あるが、伝統的にはペンタトニック。



クロンヤオー (Khlong Yaow)（左写真中央）

30～40年まえから使用されている。4つの太鼓のセットで4音ある。

Toey Khong というイーサンの人なら誰でも知っている基本の曲を元に、基本メロディからそのあと即興的に展開していくバリエーションについて教わる機会を得た。聞いて覚えるスタイルである。

ナンプラモタイ



タイ東北地方の影絵はナンプラモタイと呼ばれる。またはBak Tueとロイエットでは呼ばれる。Bakという言葉が頭につくものは中国由来だという。この日に鑑賞することができた影絵の催しの目的は村の成人のお祝い。影絵が始まる前に地元の人々のカラオケがいくつかあり、そして儀式が始まる。あまりにもフランクな儀式なのでとても安心する。こちらの地方の影絵は複数の人で影を出す。語りは一人だ。

他の人が人形を操り、語り部はスクリーンの横にいて座りながら語っている。

音楽は伝統的には太鼓、ケーン、ピンの構成だったが、近年ではシンセサイザー、エレキベース、太鼓という形に近代化されている。



芸術大学の最終試験



試験の様子。

タイ東北地方の楽器を買いたいと、Thanawat Boothontimさんに相談したところ、楽器屋さんはないので、製作者に会って直接買しましょう、とのことだった。

楽器の製作者はSonsakさん（下の写真右側）という人で、ロイエットの芸術大学の先生をされている。またVodというパンフルートは鳥を追う楽器として用

い、おもちゃのような存在だったものを楽器としての成立させた人でもある。

Sonsakさんにコンタクトをとったところ、ちょうど試験中で動けないので、大学に直接来て欲しいということであった。

ロイエットの芸術大学に赴き、学生による最終試験の様子を見学させてもらうこともできた。また目的である楽器の購入もできた。作り手から直接受け取ることができるのはとても嬉しい。



タイの伝統音楽の構成

お昼ご飯を食べながら、急に、Thanawat Bootthontimさんが私に伝統音楽の構成の説明をはじめた。Thanawat Bootthontimさんはタイ伝統音楽の教則本の著者でもある。

Pleng Tao = Traditional composition form

Pleng はsong /tune を指し、Taoとは tempoのことだという。

ゆっくりのテンポをサムチャン、中くらいのテンポをソンチャン、速いテンポをチャンディアオという。

そして、タイの音楽を知るのに欠かせないスマホアプリ⁸のことも教えてくれた。

タイ各地の楽器の名前、音、代表曲などが収録されているし、タイの伝統曲の入ったアプリもある。

⁸ Thai Tuner というアプリはタイのさまざまな楽器のチューニングがわかる。TK Appはタイの楽器の音の見本がある。いずれもタイ語で書かれている。

2-4

フアヒン

HUA HIN

<活動概要>

パトラバディ芸術高校にて観劇、フアヒン ヴィッタヤライ 中学高等学校 Huahin Vittayalai School でのワークショップ、オープンセッション形式でのライブ (Ssshhh Barにて)

Gary Hall ギャラリー ホール氏へのインタビュー、Live Looping Festival の視察、Randolf Arriola ランドルフ アリオラ氏のワークショップの見学

<移動交通手段>

1月18日-22日

バンコク市内から、Patravadi High Schoolで伝統舞踊の講師をされているアンさんの車に乗せてもらうことができた。

2月23日-25日

バンコク市内のバスターミナル サイタイマイから出発する乗合バンで移動
片道 180 THB

<滞在>

H2 Huahin Residence

35/10 ซอยหัวหิน 114 Tambon Nong Kae, Amphoe Hua Hin, Chang Wat Prachuap Khiri Khan 77110 タイ

700 THB / 1 night

および

Salesian School Residence

(Hua Hin Vittayalai School 敷地内)

<協力者の紹介>

Watchara Pluemyart ワッチャラ プルムヤート (通称 KNOTEさん)

Hua Hin Vittayalai Schoolの音楽コースの主任であり、トランペット奏者でもある。バンコクにいた時はレゲエバンドに参加したり、現在王立プリンセスガイヤーニワッタナー音楽院で務められているアノタイさん、JDさんとともに現代音楽やエレクトロニクスを中心にした音楽活動もされていた。

Gary Hall ギャラリー ホール - Keybord / Electronics player, Looping Music Festival Coordinator

もともとはLEXICONという音響メーカーの創始者であり、開発者である。

タイに移住して15年。ブッダダーサビクターというタイの僧の瞑想法に感銘をうけ、以来瞑想とループミュージックのイベントをしたり、LIVE LOOP ASIAというイベントをフアヒンで主催している。他にも共催者があり、シンガポールやクアラルンプール、ジョグジャカルタやバンドゥン、日本にもネットワークがある。

Patravadi School (<https://www.patravadischool.com/>)



フアヒンにあるパトラバディスクールはタイを代表する女優であるPatravadi Mejudhon さんが設立した芸術学校であり、現在は小学校と高校がある。

タイのアート界の第一線で活躍するアーティストが教鞭をとり、一般教養もアーティストが教えるという世界でも類をみない学校だ。

広い敷地内には、開放的な教室と、オフィス、劇場、野外劇場、広場、宿泊棟、プール、食堂、学生寮が備えられている。

アナン先生が音楽監修し、演奏するステージ「Phra Lol」を観劇させてもらうことができた。

バックステージも広々としており、準備、創作、公演までスタッフから演者、観客へと隅々まで気の届いた環境であり大変気持ちの良い場所であった。

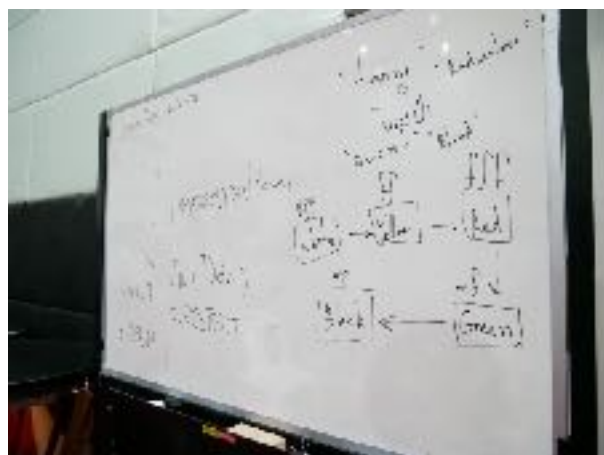


Phra Lolの音楽監督も担当されたマルチプレイヤーなアナン先生。終演後に撮影。

Hua Hin Vittayalai School (Salesian School)



80人の生徒たちとスタッフと記念撮影。写真右下が Watchara Pluemyart (KNOTE)さん



どうやって始めるかを相談するうちにどんどん作曲へと展開していく

80人で即興音楽してみよう。

フアヒンにある中高一貫のキリスト教系の学校には音楽コースがある。

Watchara Pluemyart (KNOTE)さんの提案により、学生とワークショップを開催することができた。

即興、という話だったが、学生たちはどんどん意見を出し、即興というより、ざっとした作曲になっていく。

80人に即興音楽のワークショップはかなり挑戦的だ、と判断し、こういう展開になった。色や景色、音のダイナミクスをどう共有していくかという確認の作業が作曲という行為に結びついていく。80人を3つのグループに分け、即興音楽をはじめて体験した学生たちのフィードバックは、「これまでにない体験だった。」、「知っている友達の知らなかった音や深い一面に出会うことができた。」、「音楽がより近く感じられるようになった。」という感想だった。

ワークショップの見学



Live Loop Asia Festivalの一貫で、シンガポールからのアーティストRandolf Arriolaさん(写真左)によるループミュージックのワークショップが開催され、それを見学させてもらうことができた。

音楽に必要なのはハートだ！とにかく楽しまなくちゃ！そして機材を使うことをサボってるとか言わないでどんどん楽しむこと！

お母さんが泣いている、子供が笑っている。言葉がなくても気持ちはみんなひとつだよ！

シンプルで明快なメッセージと共に繰り出される軽やかな旋律と豊かなループに参加者みんなが魅了された時間だった。

Ssshhh cafe Bar

Gary Hall さんの呼びかけにより、毎週月曜日に開催されているジャムセッションの前の時間で、即興セッションをする時間をいただくことができた。



開放的な空間でありながら、機材もしっかり揃っており、快適に演奏することができた。

ここへは2回訪れることができ、2度目はLive Loop Asia Festival があると聞いて駆けつけた。

写真は最後の全員入ったセッションの様子（左からやぶくみこ(Darboukka-JP)、Kota Taki(Guitar-JP)、Randolf Arriola(Guitar-Singapore)、Chainad Banvorntreerapak(Guitar-Thai)、Tommy Hanson(DUB-USA)、Watchara Pluemyart (Trumpet-Thai))

2-5

バンコク

BANGKOK

<活動概要>

アナン先生の本拠地でもあるバンコクでは、タイ伝統音楽の現在をはじめ、現代音楽へのアプローチ、現代美術とのコラボレーションの視察、またダブエンジニアであるTommy Hanson トミーハンソンさんとのセッション、プリンセスガイヤーニ音楽院での取り組みの調査やシラパコーン大学でのアナン先生の大学の講義の見学やワークショップなど、多岐にわたる活動を行うことができた。伝統音楽ではKorphai (コーファイ) のメンバーがボランティアで指導をしているTriamdum Suksa Schoolでの練習をはじめ、タイ伝統音楽をモチーフにしタイの伝統音階からさらに微分音を含めた17音階で作曲を実施されている巨匠Vorrayos Suksaicholヴォラヨス スクセション先生の演奏会、Korphaiのアユタヤ遺跡にて開催されるコンサートに向けてのリハーサルを見学させてもらうことができた。

王立の音楽院であるプリンセスガイヤーニヴァットナー音楽院では、AnoThai Nitibhon アノタイニティポンさんとJean-David Caillouëtさん(通称JDさん)による学内での取り組みや、今後の展望について、また学生に即興音楽についての実践やディスカッションを行うことができた。

Bangkok Art Biennale 2018開催期間中、会場にて学生とともに、美術作品の中で即興演奏をしたり、現代音楽の上演、学生新作の上演があり、鑑賞することができた。

タイのコンテンポラリーダンスを代表するPichet Klunchunピチェット クランチュンさんのChang Theatreを訪問し、ご案内いただいた。またカンパニーメンバーの新作も観劇することができた。PichetさんはBangkok Art Biennale 2018の最終イベントとして、「なにもなくなった空間で何をするか?」という哲学的とも言える問いのもと、3日間の集中的なイベントが開催されていたのを体験することができた。

Tommy Hanson さんには、3つのライブをアレンジいただき、さらにタイに来た経緯などどのようなアプローチでタイで音楽に関わっているかお話いただいた。

また今回の滞在をまるごとアレンジしてくださったアナン先生が音楽監修を務めている、C ASEAN Consonant についてのインタビューを行なった。

<移動交通手段>

バンコク市内での移動は主にGrab taxi or bike のサービスを利用。

GPSで場所を指定し、料金も表示されるので大変便利である。運転者は概ね親切で、淡々と送り迎えして下さるが、たまにうまくいかない時もあり、ジェットコースター同然の運転のバイクに(70 km/H超)乗ることもあるので、ある程度の覚悟と注意が必要である。まっすぐ、右、左、止まってくださいと伝えられる程度のタイ語力は必須と言える。

<滞在>

Suwannin Place

1858/1 Rama 8 Bridge (Krung Thonburi) Arun Ammarin Rd. Bang Yi Khan, Bang Phlat,
Bangkok 10700 Thailand

30000 THB / 2 months

<協力者の紹介>

Anant Narkkong アナン ナルコン さん (Professor of Silapakorn University)

今回の調査の全面において協力をくださった最重要人物であり、タイにおける民族音楽研究の第一人者である。テレビ、ラジオなど多くのメディアにもコメンテーターとして出演し、卓越した演奏技術と民族音楽学者としての人脈を生かして東南アジアの民族音楽ネットワークを築いている。タイ伝統音楽グループKorphaiのリーダー。近年ではC ASEAN CONSONANTの音楽監修を務め、ASEANにおける音楽の融合を見事に果たしておられる。

AnoThai Nitibhong さん (Vice President for Academic and Research / Princess Galyani Vadhtana Institute of Music)

2007年当時、英国エディンバラ大学博士課程在学中であったアノタイさんにお会いし、以来12年めの親交がある。タイに帰国されたあと、シラパコーン大学講師に着任され、王立プリンセスガイヤーニヴァッタナー音楽院が設立される時(2014年)には創設メンバーに。2017年には副学長を務められた。現在では講師という立場に戻られ、西洋音楽をベースに即興音楽の重要性と逸脱に学生たちを導いている。

Jean-David Caillouët さん (Lecturer at Princess Galyani Vadhtana Institute of Music)

アノタイさんと同じく2007年に英国エディンバラ大学博士課程在学中であったころから親交があり、現在は王立プリンセスガイヤーニヴァッタナー音楽院の講師。エレクトロニクスを得意とし、音楽院に新設されたスタジオ、レコーディングホールの原案をすべてされている。ニックネームはJD。

Suppabhorn Suwanpakdee (Lecturer at Princess Galyani Vadhtana Institute of Music)

Music group Korphai

Yaan (Experimental World Music Band) <https://www.facebook.com/yaanworldmusic/>

Tommy Hanson さん - Electronics/Dub/Bassist

Chainad Bavorntreerapak さん (BANさん) - Guitarist

Chladni Chandni さん - Violin etc

Riona Inoue (from Japan) 井上理緒奈 さん - Video Artist

タイ伝統音楽とは



タイ伝統音楽を知らずしてこの調査は始まらない。

アナン先生のご案内で、Triumdum Suksa Schoolのタイ古典音楽グループの練習を見学させていただきました。ちょうど大きな大会の前日で追い込みの練習の真っ最中であった。コーファイのメンバーはボランティアであるにも関わらず、学生の指導にあたっては徹夜や泊りがけで指導にあたるという熱心さに驚いた。





左の写真は、筆者のノートである。

廊下では個別の指導が行われている。

楽器の名前と形がメモしてある。

これらの楽器のことを調査の初日に知ることができ、そのあと各地に行った時にとっても理解がしやすく、楽だった。

タイの伝統音楽は主旋律を担うコンウォンという環状の竹の土台に金属楽器を乗せたものを基本に他の楽器が真似をしたり、パターンを少し変えたりして即興的にも演奏される。タイの伝統音楽でははじめにコンウォンという環状になった打楽器を習う。この楽器がメロディーの主幹を担う。歌の旋律をソーウーとソードゥアンという二胡の形に近い楽器とクルイー（笛）が真似をする。チインと呼ばれる小型のベルが非常に重要であり、どの曲にも欠かせない。

弦楽器にソードゥアンとソーウー、チャッカーという楽器がある。

ソードゥアンは二胡に似た楽器で竹で出来た胴とニッケルの弦が張られている、ソーウーは椰子の実のボディとナイロン製の弦が張られている。いずれも2弦のフィドルで弓は弦と弦の間に通されている。

チャッカーには太めのナイロンが張っており、ワニのような形をしたタイの琴である。独特のサワリの音を持ち、この楽器

の命とも言える。力強さが求められる楽器でどの奏者も右手にタコのようなものがある。そして奏者のキャラクターは男性であれば女性的な人が多く、女性であれば男性的な人が多い。個性の強い楽器である。

ラナーエとラナートゥンは船型の木琴であり、タイ伝統音楽の中でもとくに重要な楽器と言える。ラナートゥンの方がベースの役割をし、ラナーエより1オクターブ低い。

クルイーという笛は7穴+1穴。ボーカルのうたの後、笛がメリスマ的に（歌詞の1音節に対して、いくつかの音符を当てはめるような曲付けの仕方）

オーボエに変わる時もある。

クルイー、ソードゥアンとソーウー、ボーカルでは独特のポルタメントの表現方法があり、イアンと呼ばれる。タイ伝統音楽の強い特徴と言える。

太鼓は高い音と低い音の両面太鼓が使用される。

高い音の方をクロケック（父）、低い音の方をトゥアミア（母）と呼ぶ。2人で演奏され、一つのリズムを奏でるかのように演奏される。



Songkhla Rajabhat Universityでのタイ伝統音楽の授業の様子。



RoiEt Rajabhat Universityでのタイ伝統音楽の授業の様子。

伝統音楽、3つの様式

タイの伝統音楽の編成にはPiphat ピパット, Khrueng saiクルンサーイ, Mihori マホーリーの3種類がある。

Piphat ピパットはパーカッションが中心の編成で演劇やダンスの音楽が多い。コーンマスクの伝統舞踊もピパットの編成で演奏される。ピパットで演奏される際にはピパットモンという樽型の両面太鼓も演奏される。

Khrueng saiクルンサーイは弦楽器と笛が中心のアンサンブルで、笛を中心にチューニングを合わせて演奏される。パーティーやエンターテイメントなど華やかな目的の時に演奏されることが多い。

Mihori マホーリーはピパットとクルンサーイが一緒になった全編成で、冠婚葬祭や物語に沿って演奏する際など、大きな催事で演奏される。また目的によっては微妙に編成を変えることがある。



全国の高校が集まって行われるタイ伝統音楽のコンテストの様子。

Korphai コーファイ と 偉大な作曲家Vorrayos Suksaichol ヴォラヨス スクセクションさん



Korphaiがいつもリハーサルをしている場所。ポップな音楽のレパートリーもある。



左の場所の奥の書齋にあたる場所で、伝統音楽のリハーサル。和やかな雰囲気だが、繰り出される音楽は超絶だ。

Korphai はアナン先生がチュラロンコン大学在学の時からのタイ伝統音楽の同志が集まった、タイの伝統音楽のグループだ。メンバーには音楽的に器用な人が多く、エレキギターを弾いたり、ドラムを叩いたり、歌謡曲を演奏したり、実に柔軟で、過去にはヒップホップとコラボレーションしたり、いろんな音楽的挑戦を続けられているバンドである。見学させてもらった日は、アユタヤでの公演のためのリハーサルの見学をさせてもらった。あまり即興音楽はない。

バンコクでなにかある時は予定が押すことが多い。渋滞で人が来なかったりするので、時間通りに来たメンバーはいつまでも待つことになる。

この日も待ちぼうけ。携帯を見たり、世間話をしたり、和やかな空気で始まる。

練習だからなのか、コーファイのメンバーが凄腕メンバーすぎて軽やかにやってのけるからなのか、重たい曲をしてもどこか軽やかさを感じる。この日の伝統曲のリハーサルはVorrayos Suksaicholさんが作曲した17音階の曲だ。



タイ音階と微分音 (micro-tone)

タイの音階は1オクターブを7等分したものである。チェンマイを中心としたランナ地方の音階ともまた違う。先日アナン先生が司会を担当していた、Vorrayos Suksaicholさんのコンサート（左の写真）を見たばかりで記憶に新しい。

伝統音楽の演奏家であり、作曲家であり、タイ中から愛され、尊敬されている音楽家の一人だ。このコンサートはUstreamで配信されていたが、8万アクセスというとんでもないアクセス数だったのも印象的だった。

シラパコーン大学

アナン先生がポジションを置く、シラパコーン大学の音楽学部での民族音楽研究は、総合大学であるシラパコーンの考古学と提携した学生とのプロジェクトをしたり、また図書館には豊富な蔵書があり、専門の研究機関を持っている。

タイの多くの大学が制服で通学するのだが、この大学は自由な校風が特徴で、学生も講師も和やかな雰囲気である。

ジャズが盛んである。そして施設は練習のできる小部屋やスタジオが揃っている。

音楽学部の隣にあるカフェの片隅に、エンジニアのためのブースがあり、ケーブルの補修のための電気工具や備品が揃えられてた。（左下の写真）



シラパコーン大学の学生にレクチャーをさせてもらう機会が得られた。

私が日本で取り組んできた即興音楽の活動の紹介と、即興音楽を手と声だけで生徒たちと演奏した。

学生から、「できた音楽は良いか悪いかで判断しますか？」と質問があった。私の答えは、何が良くて何が悪いかは人それぞれ。悪いと思うことでも、振り返ってみればなくてはならない経験だったこともある。即興演奏を録音して、みんなで聞いてタイトルを考えることで、立体的に、多角的にものを見ること

が可能になる。そのために、いつも音楽も美術も「批評する」言語はなにも良いか悪いかだけではない。楽しかったか、何か引っかけたか。超個人的な、切実な一言からはじまったっていい。いいか、悪いかを議論するより。こどもだろうが、大人だろうが、その人が感じた感想やことばや、イメージはその人のもの。だから面白くなる。というような答えをした。

王立プリンセスガイヤーニヴァッタナー音楽院⁹

西洋音楽を中心に教育する機関。2014年に設立された音楽院。

国際的な音楽シンポジウムを行ったり、アジアが発信するオーケストラとは何か、という問いかけや、タイならではの西洋音楽のあり方も学生と一緒に画期的なプロジェクトを続けている。



フレッシュなエネルギーに溢れ、生徒も講師もみなとても忙しい印象を受けた。

大学内のスタジオは新設されたばかりで、機材やレイアウト、設備の提案をJDさんが担当された。

写真にはミキシングルームとスタジオ、大きなホールは360度投影可能なプロジェクターが完備されており、ほどよい反響がある。またミキシングルームと繋がっていて大編成のレコーディングも可能になっている。



広々とした練習室がたくさんあり、違った種類のグランドピアノ、ハーブシコードなどもある。

王立プリンセスガイヤーニヴァッタナー音楽院で実施されているプロジェクト

Bangkok Art Biennale 2018の会期中に行われた作品展示室内でのサイトスペシフィックなパフォーマンス、タイの民俗音楽と西洋音楽の融合をテーマにしたコンサート（リハーサル）を鑑賞することができた。

Bangkok Art Biennale 2018はBACC (Bangkok Art Contemporary Centre)で開催されており、週末ごとにイベントがあった。

既成の現代音楽に加え、学生の作曲作品、即興演奏など、空間と展示作品のコンセプトにあわせた音楽がコーディネートされ、多くの人が興味をもって鑑賞していた。

⁹王立プリンセスガイヤーニヴァッタナー音楽院 website - <http://www.pgvim.ac.th/en/>



BACCでのパフォーマンスの様子。



西洋音楽 x タイ民俗音楽



学生のデザインによる公演のポスター

学生発のコンサートプロジェクトで、学生が主導になり、各地方の大学に声かけをして実現したプロジェクト。

ランナ、イーサンなどタイの民族音楽とのコラボレーションの可能性を積極的に広げている。

ワイクルー（オーボエの音楽）とビッグバンドや、イーサンの楽器とブラスバンド。

3面投影のプロジェクターで映像が投影され、照明や映像も凝った作りになっていた。



リハーサルの様子。プロジェクターは360度に投影可能である。



イーサンの学生とのリハーサルの様子

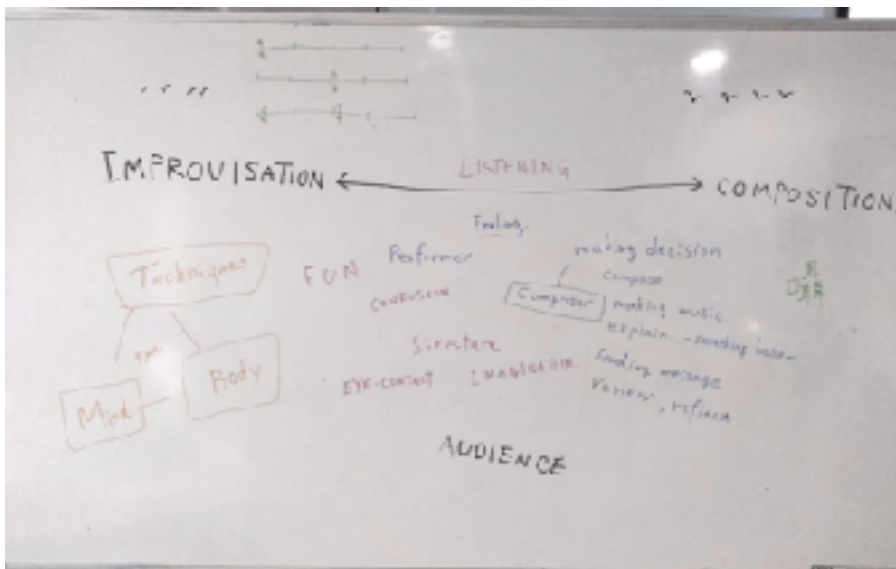
またテクノロジー中心の王立モンクット工科大学の学生ともコラボレーションしており、エンジニアを王立モンクット工科大学の学生が担当し、演奏を王立プリンセスガイヤーニヴァッター音楽院の学生が担当して、ビッグバンドや歌謡ショーなどの催しを共同開催している。



王立モンクット工科大学ホールにてリハーサルの様子。

王立プリンセスガイヤーニヴァッター音楽院でのワークショップ

滞在中2つのワークショップを行った。一つは博士課程の学生を対象に「即興音楽と作曲の間」についてのディスカッションと実践、作曲するうちに失うものはなにか、音楽は何に支えられて構成されているか。そして音楽の先には何があるのか。



「即興と作曲の間」のディスカッション中のホワイトボード

楽譜通りに正確に弾くことばかりに気をとられ、本来の演奏の持つ力を失ってはいないだろうか。その意識を即興演奏をすることで取り戻すことが可能になる。よく聞き合うこと、音楽そのもののエネルギーについて話す。



JDさんの授業での様子。写真右側には井上理緒奈さん。
スクリーン左側は即興演奏する学生たち。

もうひとつは、JDさんのクラスにて、日本から来た井上理緒奈さんとともに、映像と音楽の即興ワークショップを開催することができた。彼女の映像の手法はデジタルでありながら、アナログな要素を持つ表現方法で、手元にある素材を触りながら、ライブ感覚を体験する。

音楽はその映像に先行したり、または後追いするようにして即興で演奏をしてみる。暗くなることで、羞恥心などが少しそがれるものの、2人や3人の小編成で静かで集中した空間で演奏するのは新鮮なことらしく。ふだん地図のように見ている楽譜もなければ、感じたように音を出すのも不慣れな学生たちの奏でる音はとても新鮮な響きをしていた。

AnoThai さんへのインタビュー



AnoThai Nitibhongさん

音楽院にて西洋音楽を中心にした即興音楽の教育も積極的に実践しているアノタイさんの即興音楽の体験について聞いた。即興演奏ではじめて衝撃を受けたのは2005年のアユタヤで行われた野村誠さんとアナン先生による即興演奏の撮影に立ち会った時だったそう。それまではヤマハの音楽教育を中心に西洋音楽の教育を受けてきており、即興演奏の体験をすることがなかった。

それからエディンバラ大学に留学し、博士課程でNigel Osborne先生のコミュニティーミュージックプロジェクトに参加したりしていた。違った文化背景を持つ人たちと協働する音楽と西洋音楽の作曲を中心に研究をされていた。

働する音楽と西洋音楽の作曲を中心に研究をされていた。



写真はイーサンでの影絵の開演前の食卓。

タイ料理¹⁰と即興

即興音楽はタイ料理だ。と話はじめた。目の前にたくさんの素材があって、どんな調理法で、どんな味をつけてどう楽しむか。またいくつか種類がある中で、どんな組み合わせで食べるか、何から食べ始めるか。それは生き方を選んでいくこととも繋がっていくし、生きることは即興音楽そのものだと感じるの。ときどき、「こうじゃなかったな、今度は違うようにしてみよう」と思うことも人生。即興は、あっとおどろくようなことを自分から提示し続けることだし、それが好きだという表現にもなる。そして、即興音楽に大事なことは、呼吸をしつづけること、進みつづけること、そこで起きることは全てギフトであり、楽しめること。

¹⁰ タイ料理は甘い、酸っぱい、辛い、塩っぱい、苦いの5味を一度に体験するのが美德とされる文化で、地域によって豊かな食材と香辛料で調理される。タイの人には食事のことを考えるのは何よりも大事なことのようにも感じた。

C ASEAN CONSONANT

(参照) http://www.c-asean.org/en/portfolio/c_asean_consonant



アナン先生がここ5年でもっとも力を入れていたプロジェクトがC ASEAN CONSONANT。ビール会社のChang beer が出資して、ASEAN 諸国特有の音楽をつなぐプロジェクトである。アナンがこれまで培ってきた東南アジアでの民族音楽の人脈と音楽そのものが実を結び、周到的な準備と、秀逸なマネージメントによって実現している。

アナン先生はこのグループのことをImaginary Music Community とも表現していた。このプロジェクトにはASEAN各

10カ国から1名のアドバイザーと1名の若手音楽家の2名が選出された。若手の音楽家はいくつかの楽器の演奏が可能であること、西洋音楽の譜面が読めること、英語で意思疎通が可能であることのほかに、容姿がよく清潔感があることが求められる。さらに自国の音楽を紹介するワークショップができることも求められる。厳しい条件をクリアした中から選ばれたメンバーで構成されたアンサンブルは、各国特有の音階や特徴を生かしながら、調和的妥当点と少しの逸脱が複雑に入り混じっている。

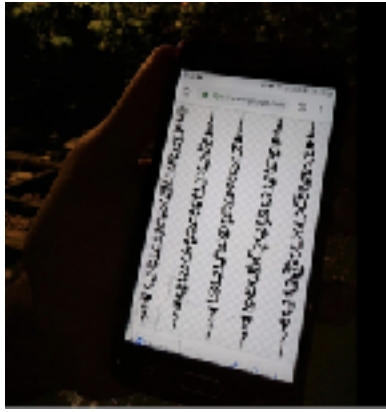
中国の上海や、南寧でも公演や滞在制作をし、現地の伝統楽器とのコラボレーションも実現させている。中国は南寧を中国における東南アジアへのゲートウェイ都市と位置づけ、街自体が抜本的に改革されたときいた。南寧のある広西州は3000万人都市で、州内の教育に積極的に東南アジアの言語教育を取り入れ、文化交流を促進するようにし、街を根本的に変えてきている。



C ASEAN CONSONANTで演奏される曲目は10カ国の各国の音楽に加え、すべてが一同に合奏する曲が1曲、また現代音楽の上演も積極的に挑戦している。中国での公演ではアメリカ人が作曲した二胡協奏曲が演奏された。5線譜に記載されているが非常に難解だが、メンバーは挑戦し、また作曲家がそれぞれの国の楽器への理解がなく書かれた部分も多かったため、ある程度の変更は仕方なかった、ということだった。

LOOP x DUB x IMPROVISATION

Tommy Hanson さんはアメリカ、ラスベガス出身。タイには在住10年になるそう。Hua Hin で開催されたLIVE LOOP ASIA FESTIVALにも出演し、バンコクを中心に音楽活動をされている。YAAN というアジアやアフリカの民族音楽と西洋楽器を演奏するメンバーが集まり、新しい音楽を生み出すバンドの主宰でもある。トミーさん自身は楽器としてはベースを演奏することがあるものの、音響機材とラップトップが主な楽器になる。彼に一番気になっていることを聞いてみた。すると「魔法」という。



トミーさんが見せてくれたタイのおまじないの例

タイの仏教の絵にもあるおまじないやお経が好きだという。ある日、スピーカーのダイアグラム図を眺めていて、ふと部屋に貼ってあるタイのおまじないの絵をみたら同じ絵だったんだ！と。

たしかにスピーカーの記号などは三角形の記号や、波型のマークで抵抗が、記載されている。私自身も音響の仕事についていたことがあるので、その話は容易に理解することができた。

トミーさんは自身の音楽はDUBエンジニア というスタイルであるという。音響のエンジニアは観客から見えないところに位置し、見えないところで演奏者の音を調整する。しかしながら見えないところで演奏者、空間、観客をつなぐ大切な役割を担っている。トミーさんの場合はステージに上がり、そ

の交差点であり、また受け取った音を変容させ空間に送り出す「表現者」である。

このポジションには絶妙なバランス感覚が求められる。音を出し過ぎてもいけない、曲げすぎてもいけない。来た音を的確に受け取り、反復させたり、広げたり、変容させたりするセンスが必要だ。

独自バランス感覚とセンスで音の中心にいるトミーさんの佇まいは、音の鑑賞者と演奏者の間に立っている。そしてそのプロセスはだいたい即興的に行われる。



KU Barでの演奏の様子

YAANというバンドにおいては決まっている楽曲もたくさんあるため、即興だけで演奏されることはないそう。



YAANとやぶ

YAAN というバンドはイーサンのケーン、アフリカのジャンベとコラ、インドのシタール、ヴァイオリン、エレキギター、ベースギター、キーボード、トミーさんで構成されるバンドで、こんな編成のバランスを取ることを可能にするのもトミーさんのセンスであり「魔法」がかけられているからだ、と感じた。

3、プロジェクトに関する今後の展望、予定

国内では、この度の調査について発表する機会を設ける予定である。
京都や東京での開催を予定している。

また、ウェブサイト¹¹を設立し、調査での映像や音源、画像を閲覧できる場所を作る予定である。
さらに英語でも共有できるように準備できたら思っている。
2019年8月27日から30日に開催される王立プリンセスガイヤーニヴァッターナー音楽院での国際シンポジウムに出席予定である。
そしてタイの音楽家ともまたコラボレーションできることを願っている。
また大きな予定としては、C ASEAN CONSONANT のアンサンブルと箏や三味線など日本の邦楽器の共演する新曲を作曲する予定だ。

4、まとめ

人生には即興が満ちている。

アノタイさんが言ったように、日常のご飯を選び取ること、自分の人生を選び取ること、会った人とどう関わるかということ、それらのことは実は全く決められておらず、いつも即興性に満ちている。タイという多様な伝統音楽の中にもたくさんの即興演奏が存在したこと、そしてどこにいくにも何通りもの方法と手段があり、楽しむ方法も、幸せになる方法も本人（プレイヤー）次第であるということ。即興音楽をリサーチしにいったのに、人生としての大きな教訓を得たと感じた。

音も人も出会いであり、必ず交流がある。混じり合う文化と違いを尊重し合い、時に逸脱をし、だいたいの調和を心がけていく。

正しいものはなく、悪いものもなく、そこにいる人同士の時間が存在する。わたしたちは変わらず感情というものがあるが、生き方や持って生まれた体、習慣、言葉、食べ物は非常に多様である。よく聴くことから始まる。お互いを認め合い、聞き合い、その空間共有できることを即興の音楽を通じて確認することができると確信できた。

多様性

生物学的な観点から、生命は多様であるほうが生存に有利であると言われている。均一化し、多様な生き方を失った動植物はたとえ強くても急な環境の変化などによって、絶滅することがわかっているからだ。

音楽の多様性、また人の個性における多様性についても同様に多様であることにより豊かに発展し、長く共生していけると私自身も考える。

尺八、箏、三味線の三曲合奏もかつては異種混合とされていたが、今日では伝統音楽である。グローバル化によって世界は画一化してきているように見える。それと同時に世界には多種多様なものもあまりにもたくさんあるということも情報化社会によって明らかになってきた。世界がよりよく見えるようになってきた。今後は通信の発展によって、遠隔でもさまざまな国や民族同士で音楽のセッションが時間差なく行えるようになるのも想像に難くない。

私たちに必要なことは、自己の個性を認め、他人のあり方を尊重する。シンプルだけれどとても難しいそのことを丁寧に繰り返していくこと、お互いと自分自身をよく聴くことが今後の未来を豊かに築いていくと考える。微笑みの国と言われるタイで音楽を通して学んだことは、よく味わうこと、愛されるために生まれてきたのだということをも多くの人との間で実践できるように協力し合い、より喜びあふれる世界にしていくことだ。

¹¹ やぶくみこwebsite内に開設。 <https://www.kumikoyabu.com/asia-fellow-2018-thailand>